

沖繩タイムス 2013年 9月 30日 (月) 掲載

9月 24日 やんばる木育円卓会議(1)紹介記事

※みらいフアンド沖繩は、企画運営、司会・フアンジッター派遣で協力しました

「木育」国頭から発信

木材の生産者ら議論

【国頭】木育での地域振興について関係者が一堂に会して議論する「やんばる木育円卓会議」(主催・村森林資源活用促進協議会)が24日、村森林公園交流センターで開かれた。木育とは木に触れる機会を増やして子育てをする考え方で、テーマは「森とともに生きる国頭村から発信する『木育』」。木材の生産や流通などに関わる出席者が人が課題を共有し、それぞれの立場から意見を出し合った。

交流センターを全面改装して11月に完成する「やんばる森のおもちゃ美術館」を木育の拠点として周知し、運営を支えるアイデアやネットワークを作るのが狙い。

東京おもちゃ美術館館長の多田千尋さんは、誕生日品に木のおもちゃを送る県外自治体の事例を紹介した。幼少期から木の魅力を伝えることで、「木のおもちゃ」と言えず、将来的にはピッ



森のおもちゃ美術館 運営アイデア探る

「グマーケットになる」と説明。「知恵をしぼって国頭ブランドをどう作るか、美術館の真価が問われる」とアドバイスした。

一方、情報発信不足も浮き彫りになった。村森林組合によると、村の森は原生林ではなく2次林。村民が木を植えながら守ってきた歴史が知られていない現状があり、同組合総務課長の山城健さんは「木を利用しないといけない立場だが、情報発信ができていない」と振り返った。

同組合販売担当の比嘉進さんは「伐期を過ぎると木の中が空洞化し使えなくなる。切って更新しないと山が循環しない」と報告。建築分野での活用はほほえないが、リュウキユウマツの積み木の販売を予定しており、「宣伝効果は大きいと思うので、そのほかの分野の販売促進にもつながるのでは」と期待した。

国頭ツーリズム協会代表理事の山川安雄さんは「木を活用することが森を守ることにつながる。循環の一つとして考え、県内外の人にも伝えていけたら」と話した。課題の解決に向け、今後も円卓会議を開く予定。

木育での地域振興について話し合った出席者ら。24日、国頭村森林公園交流センター

9/30